

令和7年度 教育課程特例校 取組のまとめ

1 取組の内容

(1) 校内研究のテーマを下記のように設定し、研究を行った。

英語科において
豊かにコミュニケーションを図ろうとする児童の育成
～児童が主体となる授業のファシリテートと言語環境の工夫を通して～

(2) 研究の視点

視点① 言語活動のファシリテート

- ・「生かす」学習課題を捉え、自分の考えを持つ場面
- ・「つなぐ」考えを伝え合い、考えを深める場面
- ・「伸ばす」学習を振り返る場面

視点② 言語環境づくり

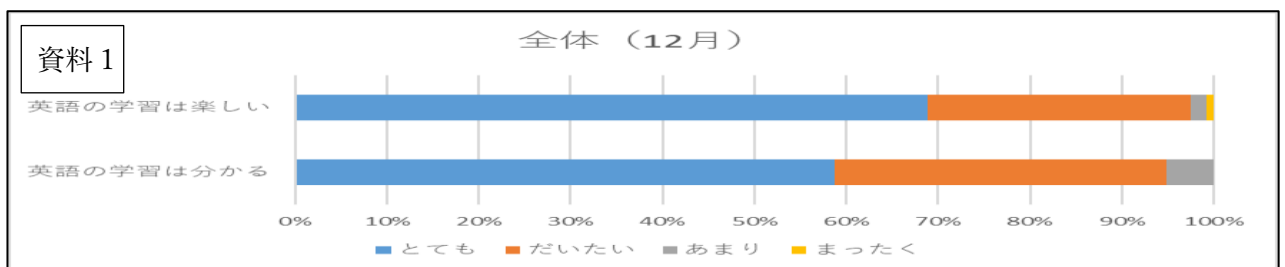
- ・English コーナーや学習のあしあと
- ・英語の日常化
- ・学習したことを発表する場の設定

2 取組に対する評価

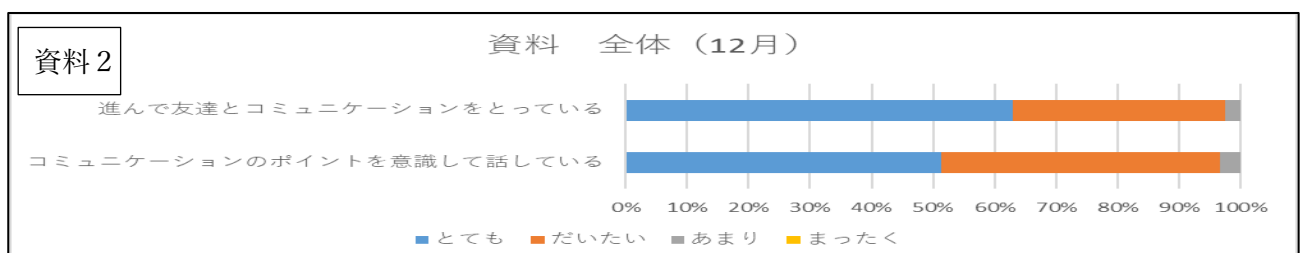
(1) 児童は豊かにコミュニケーションを図れたか

① 児童意識調査の結果から ※「とても」と「だいたい」を合わせたプラス評価の割合

児童が豊かにコミュニケーションを図ろうとするためには、その基盤となる英語への関心の高さや基本事項の理解が不可欠である。児童意識調査の「英語の授業は楽しい」という項目については、12月の時点で、「とても」「だいたい」と肯定的に回答をした児童が97.5%に達した。また、「英語の授業は分かる」についても、同様に、94.9%の児童が肯定的に回答している。これらの結果から英語への高い関心と基本事項の理解が着実に育まれていることがうかがえるとともに、豊かなコミュニケーションを図るための土台が形成されていると考えられる。(資料1)



次に、実際に豊かなコミュニケーションに結びついているかについて、児童意識調査の結果を見ていくと、12月の時点で、「進んで友達とコミュニケーションをとっている」という項目では、97.5%、「コミュニケーションのポイントを意識して話している」についても、96.7%の児童が「とても」あるいは「だいたい」と肯定的に回答しており、相手を意識したコミュニケーションを図ろうとする姿勢が育っていることが窺える。(資料2)



「英語の時間以外でも英語を使っている」という項目では、プラス評価の割合が7月の89%から12月は91.6%へと2.6ポイントの伸びが見られた。(資料3)

また「進んで自分の意見を発表している(英語の時間以外)」については、12月の時点で「とても」または「だいたい」と肯定的に回答した児童が91.6%となり、7月の85.6%と比較して6ポイントの伸びが見られた。(資料4)

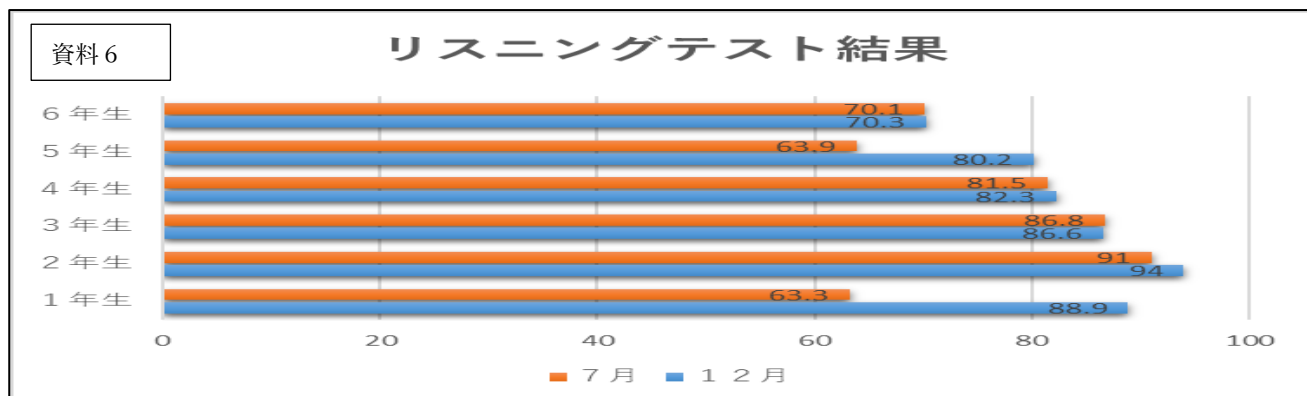
「自分の気持ちを相手に伝えている(英語の時間以外)」については、12月の時点で「とても」または「だいたい」と肯定的に回答した児童が94.2%となり、7月の91.5%と比較して2.7ポイントの伸びが見られた。(資料5)

このことから英語を用いたコミュニケーションにとどまらず、英語以外の場面においても自分の考えや気持ちを相手に伝えようとする態度が育っていることが分かる。

さらに、言語活動のファシリテートに関する項目では、12月の時点で「英語で伝えたいことを練習する時間がある」が99.2%、「学習した英語を使って話そうとしている」が95%、「学習を振り返る時間がある」が99.2%といずれも高い数値を示している。この結果から、教員の英語授業における言語活動のファシリテートが児童の意識にも肯定的に表れていると考えられる。

② リスニングテストの結果から

児童が豊かにコミュニケーションを図ることができるようにするためには、相手が伝えた内容の概要を理解する力、すなわち「聞く力」が必要である。そこで本校では、4～6年生に「英検 Jr.」の模擬試験を、1～3年生は自作のリスニングテストを実施した。7月と12月の結果を比較することで、児童の聞く力の変容を捉え、コミュニケーション能力の向上について検証した。(資料6)。



資料から分かるように、学年によって伸びに差は見られるものの、第3学年を除くと、いずれの学年に

においても7月よりも12月の方が正答率は高くなっている。特に第1学年では、7月の正答率63.3%から12月は88.9%へと25.6ポイントの大幅な向上が見られた。これは、初めて英語の学習に取り組む中で、継続的に英語の音に触れる機会を設けてきたことにより「聞く力」が大幅に伸びていることを示している。また、第3学年については、7月時点で全員が正答していた問題数が3問から5問に増加しており、これが第3学年での既習内容であったことから、学年で学習した内容が定着していると考えられる。こうした結果からいずれの学年においてもコミュニケーションの基礎となる「聞く力」が向上していることが窺える。

(2) 児童の日頃の様子から

英語コーナーの設置や毎週水曜日の「英語を使おうデー」、学習した内容を発表する場の設定などを通して、児童は日常的に英語に触れ慣れ親しむことができた。また、ハロウィンやクリスマスなどの外国のイベントを体験的に学ぶ活動を取り入れたことで、異文化への理解を深めるとともに、英語への関心や学習意欲を一層高める姿が見られた。

3 課題と今後の志向

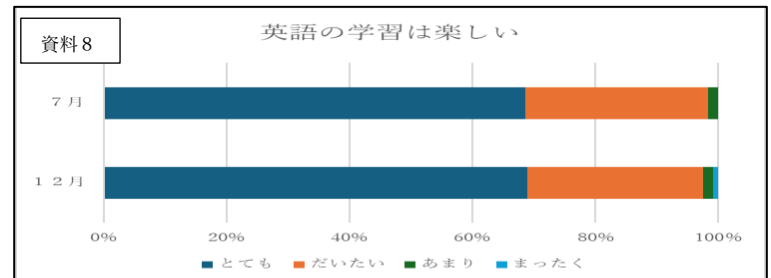
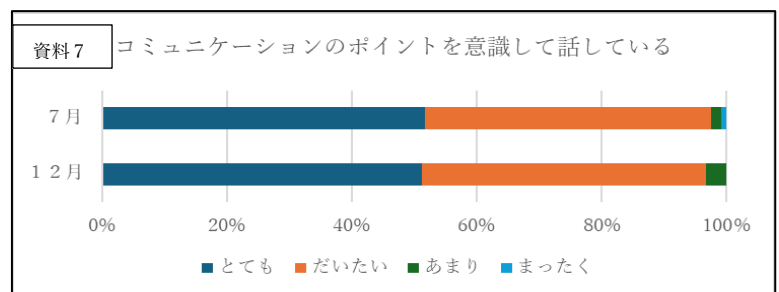
課題は、児童意識調査における「コミュニケーションのポイントを意識して話している」の項目は、12月時点で96.7%と高い数値を示しているものの、7月の97.5%よりも0.8ポイント低下している点が挙げられる。

(資料7)

また、「英語の学習は楽しい」において「まったく」と答えた児童が0.8%増えていたことから、一部の児童においては、英語学習への意欲が十分に高まっていない可能性も見られ、更なる工夫が必要である。(資料8)

さらに、これらの結果には、学年差が大きいことから、各学年の発達段階を踏まえた

指導の工夫が求められる。今後は数値の変化だけで評価するのではなく、その背景や要因を丁寧に捉えながら改善を図っていく必要がある。一方で、今回の研究を通して「言語活動のファシリテート」と「言語環境の工夫」を行うことにより、「豊かにコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」に向けて一定の成果を得ることができた。今後も研究を継続し、実践を積み重ねながらよりよい児童の姿を育んでいきたい。



4 学校運営協議会の評価

- 児童が英語を楽しみながら、相手を意識して進んでコミュニケーションを図る姿が見られ、日頃の積み重ねの成果が感じられる。今後も、英語に親しむ活動を継続し、自分の考えや気持ちを伝える力を育ててほしい。
- English コーナーや「英語を使おうデー」など、英語に触れる環境づくりが充実しており、学校全体で英語に親しむ雰囲気を感じられる。今後も地域や外国の方との交流など、実際に英語を使う機会を大切にしてほしい。